

妊産婦をモルモットにしてはならない

平良 恵子

沖縄県・医療法人仁愛会浦添総合病院助産婦

去る3月に新潟市で開催された「日本助産学会」の懇親会で、ある方とお目にかかった。話題は看護研究のこととなり、ビールの勢いも手伝って、私は「患者のためにするのが真の看護研究であって、研究者や学者が自分のためにするのは看護研究ではない…」などと、かなり言いたいことを口にした。しかし、その方の「妊産婦は研究のためのモルモットじゃない…」とつぶやいた言葉に、きついことを言うなあとと思うと同時に、ドキッとさせられた。

懇親会が終っても「妊産婦はモルモットではない」という言葉に、なぜ自分がドキッとしたのか非常に気になった。そしてその答えは自分自身を幻滅させるものだった。

3年ほど前に私は修士論文を書くためにアンケート調査を行なったことがある。一応論文は仕上げたが、それを公表することもなく、結果は私の胸のうちにしまったままである。その時の指導教授からは顔を合わせるたびに「早く発表しなさい。研究に協力してくれた妊婦さんたちへの感謝の気持ちは、研究の成果を実際の看護に役立てることで表現するしかないし、そのためにはあなたは少しでも多くの人にその成果を提供する義務がある」と言われ続けてきた。今回のドキッのおかげで、教授の言葉が再び重くのしかかってきてしまった。

つまり私は、研究論文の体裁は整えたものの、研究で得た成果を実際に妊婦さんたちに還元するという責任を果たさないままにいるのだ。責任の遂行を怠っているということは、そ

のつもりはなかったにしろ、妊婦さんたちを研究の材料として見ていたことになり、自分のために研究を行なったことになる。この自己認識はショックであったが、研究は何のために行なわれるべきか再考するきっかけとなった。

もちろん研究を行なうことによって自分自身も成長するが、やはり第一義には、患者の利益のために行なわれるということを忘れてはならないと思う。

日々の看護実践が患者中心に行なわれるべきことは異論のないところだろうが、その実践が本当に患者の役に立っているのかを振り返り、評価するためには、研究は不可欠であろうし、ケアの向上のための取り組み研究なくしてはありえないだろう。研究という形で意識して取り組まれていない場合でも、試行錯誤しながら何かを決定する過程には、研究的思考過程が含まれているはずだ。また、時間や費用の面でも制約の多い勤務状態の中では、他者の研究成果を共有することが必要となるだろうし、共有するための努力を忘れてはならないだろう。

このように臨床と研究が密接に連携しあうことが、患者中心の看護の質を引き上げるための重要なポイントになると考える。また、研究を行なうことによって、結果として自己実現やプロフェッショナルとしての自覚、態度なども得られる。このことは、さらに前進するための原動力になると思われる。

さあ、私にも研究論文を公表させていただく時が来たようだ。